

追悼



田畑先生の思い出

勝村 庸介

Katsumura Yosuke

日本アイソトープ協会の前副会長で東京大学名誉教授の田畑米穂先生が2019年11月14日に逝去された。91歳。Isotope Newsにも多数の寄稿をいただき、当協会の発展や活動にご尽力いただいた。

門下生の1人として思い出話を3つ紹介したい。

田畑先生は1945年に広島県の江田島にあった海軍兵学校(海兵)に入学された。海兵の最後の学生であった。田畑先生の手書かれた原稿に次のような記載がある。「私と核・放射線の出会いは1945年8月6日の朝8時過ぎの、あの不幸な広島に投下された原子爆弾であった。直下の被曝ではなく広島から10km余離れた江田島においてである。

爆発時の閃光と熱線を受け、引続いて到着した衝撃波を感じ、炸裂後出来た裾を真紅に染めた茸雲をまのあたりにした。茸雲は時間を経るとともに真黒な入道雲に変わり広島上空を覆いつくした。半世紀経った今でも夏になると悪夢として強烈な印象が蘇ってくる。」と記されている。田畑先生には長くご指導いただいたが、このことについては全く話された記憶がない。先生にとっては余り思い出したくない、他の人には話したくない記憶だったのかもしれない。

私が大学院学生の時、実験装置の真空管だったか、電気部品を秋葉原のジャンク屋に買いに出かけた。請求書をお願いしたときに、「君は東大の学生か。では田畑先生という先生を知ってる？」と質問を受けた。その店の方は長野の伊那の出身で、田畑先生は故郷では大変優秀で神童して知れわたっていたと言う。

海兵への進学は当時の超エリートコースであった。もちろん、「はい、田畑先生の指導を受けています」と返答し、少し自慢する気持ちが湧いたことを今でも覚えている。

戦後、田畑先生は東大の応用化学科に進学、大学院に進み、1956年に講師に採用された。当時、東京大学原子力関連大型予算の第1号として1957-58年にコバルト照射施設の建設が進み、田畑先生は建設担当の1人となった。1958年後半から γ 線照射ができるようになると、直ちに高分子の照射や重合反応の研究をスタートされた。以来、放射線化学研究に終生にわたって携わることになった。江田島での核・放射線の出会ってから13年後であった。この照射装置は東日本大震災後に余震が続いたため安全使用に不安であることから、廃止をすることを決定した。50年以上稼働したことになる。

田畑先生は東大の原子力工学科が1961年に開設されると応用放射線化学講座の助教授に昇任された。今でもそうだが、研究室は学生が来なければ成り立たず、学生の勧誘、獲得は最重要で最優先課題であった。卒業研究の紹介や大学院の進学に際して、学生に対する田畑先生の説明は、提案の研究テーマがいかに重要で、やりがいのあるものであるか、その上、世界最先端の仕事であることを強調して説明された。学生たちはこれにたいそう魅力を感じ、たらし(誑し)込まれて研究室に進学した。「女誑し」ではなく「学生誑し」であった。進学後、研究で実験が上手く行かず、落ち込み悩んで、田畑先生に「もう無理、この研究を辞めたい！」と宣言するつもりで先生の部屋を訪ねても、部屋を出る時には「またやるぞ！」とエネルギーを再注入してくださる先生でもあった。門下生は誰もこの類の経験を持つ。

私が大学院生時代、既に田畑先生は大変お忙しくされていた。ある日、突然に研究室兼学生居室に田畑先生が現れ、院生の1人(私ではない)が驚いて手に持っていた電卓を床に落としてしまった。当時の電卓は関数機能がついているものは大変貴重で高価なもので研究室にも1台あるだけであった。この出来事は代々の門下生に伝えられている。以後、田畑先生はほとんど研究室を不意に訪れることはなかったようである。

田畑先生のご冥福をお祈りいたします。

((公社)日本アイソトープ協会)